竹内まりやの「人生の扉」に想う

～ 金婚の節目に ～

後藤　忠

春がまた来るたび　ひとつ年を重ね
目に映る景色も　少しずつ変わるよ
陽気にはしゃいでいた　幼い日は遠く
気がつけば五十路を　越えた私がいる
信じられない速さで　時は過ぎ去ると
知ってしまったら
どんな小さなことも　覚えていたいと
心が言ったよ

I say it’s fun to 20
You say it’s great to be 30
And they say it’s lovely to be 40
But I feel it’s nice to be 50

満開の桜や　色づく山の紅葉を
この先いったい何度　見ることになるだろう
ひとつひとつ　人生の扉を開けては
感じるその重さ
ひとりひとり　愛する人たちのために
生きていきたいよ

I say it’s fine to be 60
You say it’s alright to be 70
And they say still good to be 80
But I’ll maybe live over 90

君のデニムの青が　褪せていくほど
味わい増すように
長い旅路の果てに　輝く何かが　誰にでもあるさ

I say it’s sad to get weak
You say it’s hard to get older
And they say that life has no meaning
But I still believe it’s worth living

2023/03/26 お陰様で私ども夫婦は金婚を迎え、その前日に子ども達が祝いの席を設けてくれた。

そこで、普段あまり歌いたがらない妻が珍しく自分から歌いたいと言って歌ったのがこの歌である。

結婚 50 年、波瀾万丈の人生、いろいろなことがあった。その間、家族が人生の節目で迎えたごく平凡な通過儀礼(イニシエーション)は大事にしてきた(つもりである)。お正月、誕生日、節句、節分、七五三、入学式、卒業式、成人式、就職、結婚式、定年退職などの折には大袈裟にならない程度に「来し方を振り返り、今を見つめ、明日を想う」脚下照顧の機会にしてきた。

しかし、金婚は誰もが迎えられることではなく、むしろ希なことだと言えよう。

師は結婚 49 年目に奥様を亡くされ、親友は 51 歳の若さでこの世を去った。ゆえに金婚は実に**有り難い**ことだと言える。

人生は好むと好まざるとに関わらず、いつも難題を次々我が身に投げかけてきた。その問いかけに対峙し、もがき、何とか答えを出しながら今に至ったことは真に奇跡であり、感無量と言う他はない。しかも、その問いかけが厳しいものであればあった程、それは得難い体験として自分の内面に強い「芯」を形成してくれたことも実感している。

歳を重ねるごとに人生は麗しく、美しさを増していく。

たどたどしく歌う妻の“人生の扉”は、まさに金婚の節目にふさわしく、聞きながらしみじみと過去を思い、まだ見ぬ明日を想うひとときとなった。